

今日の盆栽村(盆栽村とは)

設立以来 1 世紀近くの間、大宮盆栽村は創立者である職人たちの構想を実現し続けています。かつては使われていなかった街の周辺の土地が、穏やかでゆったりとした独自のあり方で、日本における盆栽文化の主な中心地として栄えるようになりました。献身的な 7 つの盆栽園または栽培場の多くは、2 代目、3 代目、4 代目、さらには 5 代目の職人によって運営され、日本に存在する中でも最も素晴らしい盆栽のいくつかを育て、販売しています。栽培場はまた、所有者に代わって大切にされてる盆栽の世話をしたり、何世紀も続く芸術形式で新しい技術を開発したり、教育を通して認識や知識を広めたりもしています。

盆栽園のほとんどはお互いから徒歩圏内にあり、土呂駅（JR 宇都宮線）または大宮公園駅（東武野田線）のいずれかを利用できます。各園は、控えめなものから堂々と巨大なものまで、様々な盆栽品種とデザインを展示しています。ですが真の盆栽愛好家は、それぞれの大宮盆栽園に独自の様式や技術があることを知っています。この多様性は、村のような同コミュニティ内での健全な競争から生まれたものです。例えば芙蓉園は、季節によって変化する雑木で有名です。一方で、現存する中で 2 番目に歴史の長い九霞園は、盆栽道具の開発で知られています。

日本では、盆栽は裕福な上流階級の娯楽というイメージが長年抱かれています。数多くの著名な政治家が盆栽を好んできたことを思えば無理もないことです。しかし大宮盆栽村では、たった 1,000 円でも小さな盆栽を買い求めることができます。

この村の他に、地域の盆栽関連の観光名所には、勉強会や休憩所に利用できる盆栽四季の家（四季を楽しむ盆栽の家）と名付けられた施設も含まれます。そしてもちろん、盆栽庭園と密接に活動する大宮盆栽美術館があります。年間の目玉イベントがやってくるのは、盆栽祭りのために庭園が集う 5 月です。

その他近隣で見応えがあるのは、大宮盆栽村設立の主要人物だった清水利太郎氏（1874～1955）の石碑がある植竹稻荷社、そして漫画家の北澤楽天氏（1876～1955）の元アトリエに建つ漫画会館です。

大宮盆栽村にとって、今日までの道のりは常に平坦なものではありませんでした。同村の過去の困難や現在直面している課題は、日本そのものの困難や課題と酷似しています。第二次世界大戦前、戦時の都合で大半が閉鎖に追いやられる前には、35 件ほどの盆栽園がありました。戦後、経済大国として国が成長する中で盆栽家たちはその職を復興しました。21 世紀になると、経済と人口両方の減退が盆栽業界に深刻な影響を及ぼし、盆栽愛好家の数も減りました。それでも大宮の盆栽家にとって、盆栽は真に好きだからこそできる仕事です。そのことが、この園芸芸術の持続的な成長と関心の高さを確保しています。